

特別支援校内委員会を中心とした表現力の育成について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校在籍時から欠席が続いていた。登校できても保健室登校であった。基本的な学力や生活習慣が身に付いていない。感情表現も不得意である。生徒と保護者から家庭の状況を聞き取り、ＳＣやＳＳＷ、不登校対応巡回教員と連携を取り、校内別室にて個別の支援を行っている。

具体的な取組

○感情表現を豊かにする取組

ＳＳＴとして、様々なカードゲーム等を実施し、勝ち負けにおける喜怒哀楽の表現を確認した。自分の表現だけでなく、相手がどのように感じているのかも表情や言葉を使って説明した。

○校内情報の共有

学校内の情報（学校だより、学年だより、保健だより、生活だより等）を校内別室に掲示した。学校で起きていることや、これから実施されることをいつでも確認できるようにした。生徒は興味をもって、「〇〇してみたな」、「△△は嫌だ」などと話すようになった。



○学力の向上

基本的な計算力を身に付けさせるため、算数ドリルから復習を行った。また、中学校の授業は、各教科の先生と連携し、オンライン授業を校内別室で視聴することができた。



○ＳＳＷとの連携

ＳＳＷと連携し、学校での取組や、家庭・保護者との対応について情報を共有している。生徒の基本的な生活習慣（朝の決まった時間に起きること）を身に付けるため、朝の決まった時間に家庭訪問をする段取りを保護者で行っている。

成果

当該生徒は、周りの教職員に、喜怒哀楽の感情表現ができるようになった。また、基本的な学力「読み・書き・計算」も身に付いてきた。さらに、基本的な生活習慣も身に付いてきた。

課題

他の生徒と関わる機会が少なかった。教室復帰を目指すに当たり、小集団でのソーシャルスキルトレーニングにも取り組む。また、生徒本人が意欲を持ち続けるようスモールステップで支援を進めることが重要である。

人間関係づくりの育成を目的にした生徒への取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生の 4 月以降、教室に入れない状況が続いており、生徒・保護者と担任、コーディネーターで面談した。当該生徒は、他者と関わることが苦手である。校内別室への登校、家庭訪問、外部機関との連携など支援を開始している。

具体的な取組

○居場所づくり

校内別室を設置し、①一日の過ごし方を決める②個別学習に取り組む③小集団で学習に取り組む④個別学習（週末は掃除の時間）として、教室に入ることができない生徒の支援を行っている。支援員だけでなく、学年教員、不登校対応巡回教員も当該生徒と対話し、生徒理解を深めている。



○外部機関との連携

教育支援センターと連携をとり、週 1 回通室している。社会的自立に向けた取組を主として、教科の学習、進路学習、校外学習などに参加している。

また、S S W とも連携し、生徒・家庭と医療・福祉を結び、必要に応じた支援を行っている。

○絆づくり

校内別室での小集団で取り組む場面では、生徒が何をしたいかアイデアを持ちより、生徒たちで取り組む内容を決めている。決め方など偏りが出ないように工夫をしている。生徒同士の気持ちを表現できる場、考える場、認め合える場などを設定している。



○家庭訪問の実施

欠席が続く場合、保護者と連絡を取り、当該生徒に無理のないよう調整し、家庭訪問を実施した。配布物や同級生からの励ましのメッセージカードなどをまとめ、手渡している。外出できる時は、一緒に近隣を散策し、悩みごとや困りごと、願いを聞き、保護者と学校で情報共有している。

成果

当該生徒は、家庭・教員・支援員・教育支援センターの連携で少しずつ学習に興味をもち、校内別室でできた仲間と過ごす楽しみを感じることができた。

課題

過去の出来事を思い出し、休むことがあったため、心理面での支援に工夫が必要である。

特別支援校内委員会を中心とした生徒に応じた支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生の 2 月下旬頃から欠席が続く。特別支援委員会、学年教員、担任でアセスメント・支援に取り組んだ。中学校 3 年生の 4 月以降も欠席が続き、親子と担任、コーディネーターで面談し、校内別室にて支援を開始した。教育支援センターやフリースクールも活用している。

具体的な取組

○チーム学校の運営

特別支援教育コーディネーターを中心に、特別支援委員会を運営し、支援が必要な生徒の情報交換を行い、未然防止・早期発見やその対応・生徒理解をそれぞれの立場から報告し、具体的支援の検討会議を行っている。巡回相談心理士も参加し、専門家の立場で助言がある。チーム学校として生徒理解を深めている。

○生徒の趣味を積極的に活用

当該生徒の好きなアニメーションを活用した支援を積極的に行っている。イラスト・絵を描くこと、スタンプラリーなどの外で行われているイベントに参加すること。身体を動かすこと。スケジュールを自分で決めることなどを体験し、学ぶことができた。



○教育支援センターとの連携

週 1 回通室している。小集団や個別の社会的自立に向けた専門的支援を受けている。

○居場所づくりの実施

校内別室を設置し、教室に入ることができない生徒の支援を行っている。また、生徒 1 人に対して支援員（または巡回教員）1 人が付き、学習支援やソーシャルスキルトレーニングに取り組んでいる。登校時には、担任もしくは所属学年教員と話す機会を設けている。関係を築く工夫をしている。

成果

生徒・家庭・教員・支援員・教育支援室の連携で進路について熟考でき、生徒自らが進路を決め、目標をもつことができた。当該生徒及び家庭への支援が十分に行うことができています。

課題

他学年の生徒とは作業を共にすることができたので、行事など同学年の生徒と協働することが課題である。

特別支援校内委員会を中心とした取組

不登校生徒の状況

対象生徒は、令和5年10月頃から休み始め、特別支援委員会、担任、当該生徒・保護者で話し合い、校内別室の利用を始めた。学校生活では集団の中に入ることが難しく、家庭では不安感を強く表すことがあった。令和6年11月現在、校内別室で落ち着いて学習やソーシャルスキルトレーニング（SST）等に取り組み、良好な友人関係が築けるようになっている。

具体的な取組

○校内別室

校内別室を設置し、教室に入ることができない生徒の学習面（学齢外の学習）や学校生活面（友人・他者との関わり方）の支援を行っている。

当該生徒には、校内別室が一番安心して過ごすことのできる場となっている。

○居場所づくり

SCや支援員などが生徒と共に活動内容を決めて、1日の活動を進めている。担任とも相談し、配信授業の参加もできるようになった。支援員からも手芸を学び、少しずつ対話力を磨いている。

○SSTの要素を積極的に活用

集団になじめないという課題を解消するため、自作のカードゲームや絵しりとりなどに取り組み、他者との関わる機会を積極的に設定している。同じような課題をもっている校内別室利用生徒と共に、生徒同士の関係を深め、認め合い、意見を交換するよう勧めている。

○校内別室での過ごし方

校内別室では、“集中タイム”と“リラックスタイム”に交互に取り入れている。集中タイムでは学習課題に取り組み、リラックスタイムでは、塗り絵や手芸、SSTなどに取り組んでいる。SCや不登校対応巡回教員、支援員が個別対応をしている。

成果

【生徒自身が意思決定できるように成長】

「図書室で本を借りたいです。」や「〇〇がしたいです。」「〇〇は嫌です。」など自分の気持ちを表現できるようになり、様々な人と接するようになった。

周りがしていることに興味をもてるようになった。少しずつ他者との関わりがもてるようになってきた。

課題

【人間関係について】

登下校時など、不意に他の生徒と会ってしまうと、次の日の登校が難しくなることがあるので支援が必要である。



特別支援校内委員会を中心とした居場所の確保について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 3 学期頃から欠席が続き、不登校になった。担任が当該生徒及び保護者から、対人関係の不安について聞き取ることができた。校内別室に定期的に登校し、不登校対応巡回教員及び校内別室指導支援員と共に、個別の支援を行っている。現在は、体調不良が理由で休みが続いている。

具体的な取組

○チーム学校

特別支援教育コーディネーターを中心に、校長・副校長・各学年担当・特別支援教室担当・ＳＣからなる組織で、教育的支援が必要な生徒について情報交換を行い、未然防止・早期発見やその対応、生徒情報をそれぞれの立場から報告し、具体的支援の検討会議を行っている。

○家庭・担任・支援員との連携

週 2 回校内別室に登校したときに、担任と会話し配布物の受け渡しをしている。不登校対応巡回教員または校内別室指導支援員と共に学習している。下校後には家庭と連絡を取り、当該生徒の様子や学習内容などについて情報共有を行っている。保護者が取組の様子を参観し、一緒に体験することもあった。欠席が続く際は、家庭訪問を実施し、生徒、保護者の状況把握に努めている。

○居場所づくり

校内別室を設置し、登校の意思はあるが、教室に入ることができない生徒の支援を行っている。この取組は、生徒一人に対して不登校対応巡回教員と支援員とが連携して、該当する生徒が通室する際に学級担任や学年教員と話す機会を設けている。タブレット端末も活用し、学習面の支援などを行っている。

○ＳＳＴ

対人関係に課題があったことから、相手の思いや考えを感知するトレーニングとして、カードゲームを活用したエクササイズを実施した。



成果

【生徒自身が意思決定できるように成長】

生徒・家庭・教員・不登校対応巡回教員・支援員の連携で、開始から 2 か月後には当該生徒自らが将来の夢や希望などの進路について考え、4 か月後には学ぶ意義についても理解し、夢を話すようになった。

課題

社会的な自立に向けて必要な力を育むことが課題。特に集団になじめない要因の解消をするために、ＳＣや医療との連携を図ることも必要である。